

いさわ しゅうじ  
♪ 伊沢 修二 (1851-1917)

唱歌を教育に取り入れた、近代日本の音楽教育の開拓者。晩年に取  
り組んだ吃音矯正においても大きな足跡を残す。

■唱歌関係の主な著（編）書

『小学唱歌』『唱歌略説』『音楽取調成績申報書』

■こんな人物

明治7年（1874）愛知師範学校長に就任。そこで、幼稚園のような施  
設をつくり、唱歌と遊戯を教えた。これが、伊沢の唱歌教育の最初であ  
る。この背景には、母校大学南校のフルベッキ（1830-98）から贈られ  
た『ゼ、チャイルド（児童論）』（マチルダ・H・クリーゲ著 1872年刊）  
があった。彼は、本書のほかにも、文部省が欧米から取り寄せた多くの  
教育書を通読し、この頃すでにフレーベル主義やペスタロッチ主義など  
の欧米の教育思想にかなり精通していたと指摘される。

明治8年（1875）～11年（1878）、師範学科取調のための留学生の1  
人として米国に留学。そこで、音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メ  
ーソン（1818-1896）を通して「唱歌」と「西洋音階」を、音声生理学  
のグラハム・ベル（1847-1922）から「視話法」を学んだ。これらを通じ  
て唱歌教育の重要性を痛感し、明治11年、留学監督の目賀田種太郎（め  
がた・たねたろう 1853-1926）とともに「学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業  
ニ着手スベキ、在米国目賀田種太郎、伊澤修二ノ見込書」を提出し、音  
楽取調掛の設置を建言した。この音楽取調掛がその後、官立東京音楽学  
校へと発展し、明治21年（1888）、伊沢はその初代校長となる。

こうして、伊沢は、近代日本の教育、特に音楽教育の開拓者として、  
その設計に尽力した。

一方、明治23年（1890）には、国家主義教育の普及を図る教育団体

「国家教育社」を設立。当時日本の領有となった台湾に、国家教育の輸出・発展のために渡る（1895）など、国家教育の推進に邁進する一面もあった。

また、伊沢は「視話法」との出会いから、発音に関心をもっていた。「視話法」は、音を発声器（唇、舌、喉等）の位置などの状態により示すもので、いわば音を目で視る方法である。ベルからこれを学んだ伊沢は、聾啞者の発音矯正を試みたり、中国語などの言語教育にも取り組んでいるが、その知識と関心は、晩年、社会福祉組織「楽石社」を創立して行った吃音矯正事業へとつながった。

#### ■ 生没年

嘉永4年（1851）信濃国（現・長野県）伊那郡高遠城下東高遠大屋敷、下級士族の家に生まれる。大正6年（1917）脳出血により死去。享年65歳。墓所は東京 雑司ヶ谷墓地。

#### ♪ 参考文献

- ・『伊沢修二』上沼八郎著 吉川弘文館 1962（人物叢書98）[289.1/411]
- ・『伊沢修二・伊沢多喜男』原平夫著 伊那毎日新聞社 1987（上伊那近代人物叢書1）[281.52/8]
- ・『楽石自伝教界周遊前記/楽石伊沢修二先生』伊沢修二君還暦祝賀会著/故伊沢先生記念事業会著 大空社 1988（伝記叢書23）[289.1/2555]
- ・『国家と音楽：伊沢修二がめざした日本近代』奥中康人著 春秋社 2008 [762.1/243]